

#### IV Queis Dietrich V. 学術上級研究員（ドイツ連邦共和国連邦立国防大学、ドイツ） の短期招請について

文学部教授 古屋野 素材

##### 現代大学教師の力量形成

クヴァイス氏講演「ドイツにおける大学教育の構造、諸問題及び改革動向」によせて

マス・プロ化した現代の大学教師には、どのような能力が求められるのか。

現代の大学教師には、多様な力量が求められている。少し考えただけでも、①専門学問にかかわる研究能力、②担当する科目や学問を、学生の理解力にあわせて、わかりやすく、すじみちをたてて教え、学生の人格形成や持って生まれた才能を引き出す能力、③大学や学部などの組織運営を担う力（自治の精神）、この3つの能力はすぐ思いつく。その他に、社会的な仕事（たとえば、省庁・都道府県の委員を引き受けることや、自治会やPTAなどを担い組織を動かす）をこなしていく能力もこのなかに入れてもよいであろう。このように、多様である。

学生の立場からみたばあい、大学教師の任務は、学生にものを考える知的修練・思考訓練を施すことにある。教育という側面からみれば、教育とは一見関係ないようにみえる研究も、教師個人にとっては知的修練の最前線と言えよう。大学教師の究極の任務は、就職のせわでもなく、人生問題の相談にのることでもなく、結婚式の仲人をするということでもない。学生に学問的思考訓を、責任をもって施すこと、これ以外にない。その他のことは、大切なことではあるが、付加的な価値しかもたず、本質ではない。

大学教師の大部分は自分の職業の本性や属性を知る必要がある。ところが、大学教師が一番知らないことは、大学教師という職業についてである。専門職業と考えられているにもかかわらず資格が不要なこと、どのような歴史的背景をもった職業なのか、法的規定はどうなっているか、国立大学の教授と私立大学の教授は、全く同じと考えてよいのか、ちがうとすればどこがどうちがうのか、大学には自治や学問の自由が保障されているが、それは、いかなる歴史的事実をうけて形成されてきたのか、法的背景はあるのかないのか、この職業の特性は何かetc→といった問題にスラスラと答える大学教師は、ほとんどいないと断言してよい。なかには、こういうことすら全く考えたことのない「オメデタイ」人もいるだろう。それでも務まる職業なのである。

無知な教師ほど、「君たちが僕の授業を理解できないのは、要するに君たちに理解するだけの力がないからだ。ぼくは悪くない」と放言したり、半分以上休講にしたり、全くわけのわからない自閉症的な授業をしたり、少し良識や知識のある人なら絶対にしないことをやってしまう。いや、知らない方が、オメデタクテ幸せかも知れない。無知であれば、悩まなくてすむから。

私たち大学教師は、実に様々な形態で、学生に教えている。主な形態は、①講義（教材の組み立て方、導入・展開・終結を考える）、②講読（史籍講読、外書講読）、③ゼミナールにおいては討論（あるテーマについて自由に討論する。立場を決めて、論争する授業形態）や演説（学生があるテーマについて発表して質疑応答をする。テーマの決め方、資料収集や発表準備のしかたなどもこれに入る）をさせる、④実験（工業、化学、農業など）、⑤実習（教育実習、地理実習、海洋実習、解剖実習など）、⑥教育メディア（VTR、OHP、コンピューターなど）を使った授業・模擬体験などである。

ところが、日本の大学教師は、養成のプロセスで、いかに教えるかという教授学的な訓練を全く受けない。したがって、たいていの学生を悩ませる授業をする。学生の悩みを少し聞いてみよう。

①「一年間、予備校に通っていましたので、どうしても大学の授業と予備校の授業を比べてしまいました。大学教授の授業は整理されてなく、わかりにくい専門用語を解説なしで多用するので何が言いたいのかわかりませんでした。さらに黒板を使わず、単調な話し方でたらたらと授業をするのですぐに眠くなりました。さらに予備校講師と比べて大学教授は（お忙しいとは思いますが）授業に対する熱意というものが感じられませんでした。」

②「まず話をわかりやすくするために具体例を多くあげてほしいことと、声を大きく、できれば学生に向かって話しかけるように講義してほしいです。

また、僕は怠慢な性格なので、教師の言っていることをノートにとるのはめんどうなので、教師は、授業の内容を整理して黒板に書いてほしいです。最後に教師は、面白い授業をしなくてもいいので、熱心に授業をしてほしいと思います。熱意が伝われば、やる気のある生徒はついていきます。」

③「どの授業をみても、教師が生徒の興味・関心などを無視して一方的に講義を進めている傾向がある。ほとんど独演会になってしまっており、教師と生徒が対話を通して考え深めていくということがない。大教室で大人数を相手にしての授業ならば仕方ないが、人数が少なくてもそうである。教師は如何にしたら生徒の興味を喚起できるかに留意し、生徒と十分なコミュニケーションをとりつつ授業を進めていくべきだと思う。」

これらの事例は、われわれ大学教師に、痛烈な反省を促す。そして、やはり大学教師も教授技術について、本格的に勉強しなければならないという気持ちにさせる。

クヴァイス氏の講演「ドイツにおける大学教育の構造、諸問題及び改革動向」は、まさにこうしたニーズに応えてくれるものであった。とりわけ、「担当する科目や学問を、学生の理解力にあわせて、わかりやすく、すじみちをたてて教え、学生の人格形成や持って生まれた才能を引き出す能力」のかかわるものであった。それだけにとどまらず、日本の大学のモデルの一つとなったドイツの大学改革はどの方向にいかうとしているのか、ドイツにおける大学教師の養成は現在どうなっており、将来どういう方向に行こうとしているのか、大学教師になってから、力量形成のためにどのようなプログラムが用意されているのか、その内容はどのようなものなのか、といったわれわれの切実な疑問に十分応えてくれ

る内容を含んでいるものであった。

大切なことは、私たち日本の大学の教育現実をふまえて、問題意識をもって外国の授業工夫の事例を学び、私たちの日常の教育に活用する、生かす、実践することにほかならない。(2001年3月28日記)